

## CHOSHI (第10話)

(昭和34年)

夏の大会のベンチ入りが発表された。1年生では藤本だけが、ベンチ入りになった。レギュラー組の藤本が練習を終え、部室に戻ろうとすると部室の中から雑用をしている1年生の声が聞こえた。『俺、もう野球部を辞める。どうせ、いくら練習しても、いくら雑用をしても、このままベンチにすら入れないで高校3年間終わるんだ。いつも藤本ばかり特別扱いされて。もうやってられない。』藤本が部室に入りずらそうにしていると、後ろに海上が立っていた。海上は部室のドアをあけた。『おい、今、文句を言っていた奴、さっさと辞めろ。俺は甲子園に行くために野球をやっているんだ。藤本がエースでなければ、甲子園に行けないんだ。藤本の後ろを守る気のない奴は、さっさとここから出て行け!』

結局、夏の大会が終わる頃には半数の一年生が辞めていった。3年間最後まで残った部員は13名だった。

夏の大会が始まった。先輩達も強く甲子園が期待されたが、その夢は叶わなかった。そして大会後に1・2年生の新チームが結成され、藤本はエースになった。

藤本がエースになった銚子商業は強かった。秋の千葉県大会優勝。関東大会では慶應高校に惜敗したが、周囲の期待は高まり、来年の夏こそは甲子園に行けるという機運が盛り上がった。

しかし、藤本はこの頃から肩の異変を感じていた。小学校からずっと一人エースで投げてきた疲労がたまっていた。勝ち進むと連戦になるので、さらに肩に負担がかかることになった。藤本は、周囲の期待にこたえるまで肩がもつのか心配だった。そして、春になると、肩の違和感がはっきりし始め、5月に行われた春の大会ではベスト16で負けてしまった。

そして、ついに藤本の肩が悲鳴をあげた。肩は全く上がらなくなった。藤本は千葉医大で緊急手術をした。しかし、高2の夏の大会に間に合うことは無く、藤本はベンチにすら入れなかった。そして、銚子商業は千葉地区予選で負け、甲子園に行くことはできなかった。

手術をしても、藤本の肩が昔のようにあがることは無かった。『もう、マウンドに上がることは無いだろうな。』藤本は、そんなことを思った。退院すると、自宅には小学校からの同級生の下田や小林、中居そして銚子四中の時のキャッチャーをしていた春日小の岩瀬が遊びに来て、現在のチームの様子を教えてくれた。『新チームは飯岡中の岡本がエース。キャッチャーが岩瀬。一塁が中居、二塁が芝野、三塁が一年生の芝、ショートが関根、レフトが藤原。センターが下田、ライトが海上。』

藤本はそれを聞いて思った、『もう、俺の出る幕は無いな。』